

当時の社会情勢から読み解く『十二月八日』

野 上 紗 緒 里

一 はじめに

太宰治『十二月八日』（初出…『婦人公論』一九四二・二初刊本…『女性』（博文館、一九四二・六）は庶民である「私」が太平洋戦争開戦日である十二月八日にどのような生活を送っていたのか、日記形式で描いたものである。そしてその日記には「私」の戦争に対しての熱い思い、その一方戦争が始まるにも関わらず、だらしなない「主人」に対しての呆れ等が書かれている。

『十二月八日』は従来、好戦的なのか、反戦的なのかといった観点で、少なからず論じられてきた。例えば好戦派では、赤木幸之氏¹⁾が、作中で「主人」が述べる「信仰」を「戦時下を（信仰）」にも似た信念をもって書き継いで行こうとする、芸術家太宰治の決意表明と読み取りたい。」「十二月八日」という小説は、東亜戦争開戦日の太宰治の昂ぶりを素直に書き留めた戦争小説なのである。」と述べているのに対し、反戦派では、鈴木敬子氏は一見好戦的に見える「何とかしてしちひやくといってもらいたい」「なんとかして日本が東で、アメリカが西という方法はないものか」という本文にある「主人」の考えを「不可能を願う滑稽さと同時に、いかに批判を持

とうとも、そのバカバカしさをどうにもできぬ知識人としての自己の無力、非力さへの自嘲もこめられていると感じるのは、深読みのしすぎだろうか。太宰治は、日本に数少ない諷刺文学を書き得る才能をもった作家ではなかったか。」²⁾と述べている。

しかし、戦争に肯定的と読み解くと、「主人」は戦争が始まるにも関わらず、国民服を用意していなかったり、「西太平洋つて、どの辺だね？ サンフランシスコかね？」と、戦争がどこで行われているのかすら把握していなかったり、戦争に対し肯定的とは言えない場面が多々ある。また否定的と読み解くと「私」が熱心に戦争の情報を仕入れたがったり、戦争の話をしたがったりする様子から完全に否定的とは言いい切れない部分がある。

このどっちつかずの奇妙な文章を読み解くため本稿では「私」と「主人」の言動で不自然さが介在する場面を取り上げ、当時の社会情勢と照らし合わせ考察を行った。社会情勢を考え、『十二月八日』を読み込むことで、今まで不自然だと思われていた場面が、自ずと納得できるようになる。

二 「主人」の不自然さ

「主人」の言動には不自然な場面が多々ある。まず、これから戦争だというのに「国民服も何も、こしらえていない」ことが挙げられる。昭和十五年一月に「国民服令」が制定されながらも、開戦日に国民服をこしらえていないということを反戦的であると思う人は少なくないであろう。しかし、井上雅人氏は、「国民服令」という法令はあったものの、着用を強制するものではなく、普及率も空襲が本格化するまでは、せいぜい二〇%という代物である。」と述べている。つまり当時国民服を着用している国民はむしろほとんどいなかったことが伺える。そのため、「私」は「主人」の不精さを批判しているが、当時の様子では、「主人」が特別不精というわけではなさそうである。

次に、「主人」の地理の知識が皆無である点である。「これでよく、大学なんかへ入学できたものだ」とあるように、「主人」は大学卒業ないし中退者であるにも関わらず、「西太平洋つて、どの辺だね？ サンフランシスコかね？」と言ったり、南極が一番暑く、北極が一番寒いと勘違いをしていたり、汽船から見えた佐渡の鳥影を満州だと思っていたりと現代では驚くような知識の無さである。そこで当時の学生の学力について調べてみた。

『文藝春秋』（一九三七・五）では三木清氏が「学生の知能低下に就いて」という題で、当時の大学生の学力低下を次のように危惧している。

或る大学生の話によると、事変後の高等学校生は殆ど何等の社

会的関心も持たずにただ学校を卒業しさえすれば好いというやうな気持ちで大学に入ってくる。（中略）学校の課題以外の勉強に「無駄な」努力を費すことをなるべく避けようとする功利主義から、或ひは社会的関心を持つといふやうな危険なことからなるべく遠ざからうとする現実主義から、彼らは「キング学生」になるのである

「キング学生」とは学校の課程以外には「キング」という大衆雑誌くらいしか読まないことを指し示している。また三年後である『文藝春秋』（一九四〇・三）の「動揺する国民生活の断面」という座談会の記録でも大学生の学力が低下していることが伺える。

菊池寛

僕などは社に入れてくれといふ人を個人的に口頭試問するんですが、非常に不満ですね。支那の地理などは殆ど知らないんです。極端な話だけれども南京と上海の間にある町を一つ言ってみると言ったら重慶だといふんです。滅茶だけれども、さういふ大学生があるんです。中学生などは却つてよく知つてゐますよ。中学生は盛んに時局の話をしてゐるらしいですね。大学生は地理観念もないし時局のニュースも見てゐないんですね。

三木清氏という満州事変は一九三一年に起きており、当時の「主人」の年齢は二二歳の学生である。このような記録から「主人」の異常な地理知識不足の描写は納得がいく。当時の学生は、ただ学校を卒業さえすればよいという観念のため、時局ニュース等に興味がなく、

大学を出ていても中国の地理等も把握していない人が多々いたよう
だ。

また、「主人」の友人の「伊馬さん」が遊びに来たとき、紀元二
千七百年の読み方を「ななひやくねん」と言うのか「しちひやくね
ん」というのかという「私」からすると馬鹿らしいことを二人で真
剣に話し合っている。「主人」だけではなく、「伊馬さん」ですら馬
鹿らしい話を真剣に話し合っている様子から「主人」が特別知識不
足であったり、ずれていたりしたのではないと読み取れる。つまり
「主人」の地理知識不足や観点のずれは当時の人々の大学時代の学
力が低下しているということを忠実に再現していると考えるべきで
あらう。伊藤彰浩氏は当時高等教育を受けた人々がどのような扱い
を受け、どのような就職をしたか、次のように述べている。

明治維新とともに近代化を開始し、西洋的な高等教育制度の導
入を開始したわが国において、当初から高等教育卒業生には特
権的な地位が与えられていた。多くの場合、彼らには有利な就
職先と将来の栄達が約束され、高い社会的威信がもたらされた
というのも、近代的教育を受けた彼らは、西洋文明の伝達者とし
ての役割を、しかもその希少性ゆえの貴重な人的資源としての
役割を、強く期待されていたからである。

このように高等教育制度導入時、高等教育を受けた者は優遇されて
いたようである。そのため「私」を含む一般市民にも高等教育を受
けている人は頭が良いエリートであらうという観念が広がったこと
が予想される。「私」は「主人」の著しい地理知識不足から「これ

でよく、大学なんかへ入学できたものだ。ただ、呆れるばかりであ
る。」と皮肉っている。大学に通っていた癖にそんなことも知らな
いのはあり得ないと言わんばかりだ。しかし、それは違う。確かに
高等教育制度導入時は高等教育を受けた者は優遇されてきたが年が
経つにつれ、昭和恐慌等の経済的不況や高等教育拡大に伴いその状
況も変化していったのである。引き続き伊藤彰浩氏は次のように述
べている。

高等教育規模の拡大がすすむにしたがって、初期の卒業生が就
いた職に匹敵する威信をもった地位を、その後輩たちが得るこ
とは次第に困難になっていったのである。（中略）この時期に高
等教育卒業生の就職難がひとつの主要な社会問題として、人々
に意識されていたことは間違いない事実であった。そのこと
を端的に示しているのは「高等遊民」という表現の登場であり、
またその言葉が当時の流行語となったことである。（中略）当
時の論調を詳しくみると、経済不況という一時的要因以上に、
青年層の進学行動や選職行動に関してこの時期に顕著になりつ
つあった諸傾向が、強く問題視されていたことがわかる。すな
わち、高等教育を受けるに十分な資質―すなわち「体力脳力及
び財力」―をもたず、進学を「青年立志の唯一手段」とみなし
て高等教育機関に殺到する青年たちが強い非難の対象となり、
そうした進学熱の―批判者たちに言わせれば―過熱傾向と、さ
らには、それを助長する進学予備機関化した不釣り合いな高等教
育規模の拡大を、ひいてはその結果として卒業生の過剰をもた
らすと考えられていたのである。加えて、学校卒業生の職業選

扱行動も問題とされ、多くの卒業生が「俸給に依りて衣食する」ホワイトカラー職を強く志向し、そうした学生の職業選択の柔軟性の欠如が就職難をさらに悪化させていると論じられてもいたのであった。

このように、大学を出た人は確実の良い職につけるといった保障はなくなった。また、就職難に加え、世界恐慌や戦争が近くなると思想統制等が行われ、教育機関がさらに機能不全に陥る。『日本教育史概論』では次のように書かれている。

一九二九（昭和四）年三月、政府は衆議院において、治安維持法改正緊急勅令承諾案を可決し、四月に、再び共産党員の市川正一ら三九九人を全国的規模で、検挙起訴し、これによって共産党は破壊的打撃を受ける（四・一六事件）。さらに勅令をもつて、治安維持法改正公布施行（死刑、無期を追加する。）ついでに内務省に保安課を置き、思想取り締まりの特別高等警察（特高）を新設し、本格的な取り締まりに乗り出した。（中略）また二月、日本共産党の機関誌「赤旗」が創刊され、共産党の存在が知識人を中心に理論的な重みを増し始めた。このため内務省は、三月一五日に全国の共産党員、日本共産青年同盟員、およびシンパの一斉検挙を始め、容疑者として一五六八人が検挙され、（三・一五事件）うち四八八人が起訴された。起訴された中には、学生が多数含まれており、文部省は学生・生徒の思想対策のために、一〇月、学生課を新設し、帝国大学、官立大学と主な直轄学校に、学生・生徒主事、同主事補を置き、

「思想善導費」を配分した。主事、主事補は、学生・生徒の思想傾向の調査だけでなく、教員とその教授内容の監督までを任務としていた。学生課は翌年、学生部に一九三四（昭和九）年には思想局に昇格され、機能が拡大、強化されていた。

国内では、内務省が初の全国失業状況調査を実施し、一月に結果を発表した。それによると、全国の失業者は三〇万一九五人となっている。さらに一〇月に起きた、ニューヨーク株式市場の大暴落に始まる世界恐慌が不況にあえぐ日本を巻き込み、失業者があふれ、ルンペンとかルンペンプロレタリアートとかいう語が定着するほどになって、左翼の活動も活発化していった。（中略）また東大学生課発表によると、東大の学生の二五％がアルバイトをしており、奨学金を生活費にあてる苦学生が目立ち、五月発表の卒業者の就職率は三九・一％と低迷する。

一つ目の引用では治安維持法など思想統制が年々強化されていたことを示している。その中で注目すべきところは思想統制機関が警察等外部だけではなく、学校内にも設備されている点である。本来の学生課の役割とは国家にとって良からぬ思想を持つであろう学生を取り締まる機関であったようだ。また教員や教授内容まで監督するという徹底ぶりだ。二つ目の引用では大学生の就職難について示されている。エリートが集う東京帝国大学ですら、就職率は三九・一％に留まっている。また在学中も二五％がアルバイトをして、奨学金を生活費に充てるという困窮ぶりだ。

一生懸命勉強をし、良い大学を出ても良い職につけるとは限らな

くなってしまうことから、真面目に勉強しても仕方がないというあきらめ、また大学で勉強するのにも、アルバイトと併行しなければ生活ができないため、勉強する時間が減ってしまう、これらの時代背景が『十二月八日』において「主人」が著しい常識不足な人間になってしまった原因の一端にあると推測する。「主人」とは経済不況、思想統制、就職難等の当時の時代背景を忠実に再現した人物なのではないか。

三 国による思想統制

「主人」に見られる知識の欠如が、当時の大卒者一般に見られる現象であることを確認した。ゆえに、ここに「主人」の「おどけ」を見出し、それを根拠に本小説に反戦的傾向を指摘する従来の考察は必ずしも妥当とは言えない。では『十二月八日』は好戦的に書かれた作品なのだろうか。

好戦的だと思われる判断材料は主に、「私」が戦争について意欲的な人物として書かれている場面である。例えば次のような箇所があげられる。

「大本営陸海軍部発表。帝国陸海軍は今八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり。」しめ切った雨戸のすきまから、まっくらな私の部屋に、光のさし込むやうに強くあざやかに聞えた。二度、朗々と繰り返した。それを、じつと聞いてゐるうちに、私の人間は変わってしまった。強い光線を受けて、からだが見えるやうな感じ。あるひは、聖霊の息吹きを受けて、つめたい花びらをいちまい胸の中に宿したやうな気持ち。

日本も、けさから、ちがふ日本になったのだ。

日本の綺麗な兵隊さん、どうか、彼等を滅つちやくちやに、やつつけてください。これから私たちの家庭も、いろいろ物が足りなくて、ひどく困る事もあるでせうが、御心配は要りません。私たちは平気です。いやだなあ、といふ気持は、少しも起らない。

開戦が発表された日の描写は他の作家の作品と似通った部分が多い。例えば、坂口安吾『真珠』の描写「涙が流れた。言葉のいらない時が来た。必要ならば、僕の命も捧げねばならぬ。」⁶⁾や、上林暁『歴史の日』の描写「我々の住む世界は、それほどまでに新しい世界へ急展開したことを、私ははつきりと感じた。」⁷⁾等が挙げられる。このような描写から著者も他の作家も検閲を意識し、戦争に対し好戦的に書いたと感じる人は多いであろう。しかし、この『十二月八日』の好戦的要素には不自然さが介在する。

好戦的要素は主に「私」の愛国心からきている。しかし、「私」の愛国心は中途半端なものが多い。例えば、「私」は「無神経なアメリカの兵隊どもが、のそのそ歩き廻るなど、考へただけでもたまらない」等と述べながらも日本が完全勝利するとは考えず、空襲で日本が攻められることが頭に過つていたり、「主人」に「日本は、本当に大丈夫でせうか」と聞いたりする事等から戦争への不安を感じとれる。また、「私」は戦争に関心を抱いているように思われる描写が多く存在するが、内容は非常に薄いものである。「ああ、誰かと、うんと戦争の話をしたい。やりましたわね、いよいよはじま

つたのねえ、なんて。」と述べているが、「お隣の奥さん」や「亀井さん」の家を訪ねた時、「早大の佐藤さん」や「今さん」が訪ねて来た時等、いくらでも戦争の話をする機会があったのにも関わらずしていない。戦争について書かれた新聞の夕刊が来て、夕刊を読んだ感想が「感激をあらたにした」ということだけで一切具体的な思い等は書かれていない。次の描写は「私」が娘の園子をおんぶして銭湯から帰る場面である。

銭湯へ行く時には、道も明るかつたのに、帰る時には、もう真つ暗だつた。灯火管制なのだ。もうこれは、演習ではないのだ。心の異様に引きしまるのを覚える。でも、これは少し暗すぎるのではあるまいか。こんな暗い道、今まで歩いた事がない。

この描写は「私」が初めて本当に開戦を意識した場面であると捉えられる。今までの場面ではラジオを聴き、『真珠』や『歴史の日』と似通った心情を述べ、米兵に対する嫌悪感を抱きながらも、開戦日に灯火管制になっただけで「でもこれは少し暗すぎるのではあるまいか」と恐怖心を露わにしている。

好戦的であるならわざわざ不安要素を入れる必要はない。好戦的とも反戦的ともいきれないこの作品は、別の観点で書かれているのではないであろうか。そのヒントは、「私」が述べている。

けふの日記は特別に、ていねいに書いて置きませう。昭和十六年の十二月八日には日本のまづしい家庭の主婦は、どんな一日を送つたかよつと書いて置きませう。もう百年ほど経つて日

本が紀元二千七百年の美しいお祝ひをしてゐる頃に、私の此の日記帳が、どこかの土蔵の隅から発見せられて、百年前の大事な日に、わが日本の主婦が、こんな生活をしてゐたといふ事がわかつたら、すこしは歴史の参考になるかも知れない。だから文章はたいへん下手でも、嘘だけは書かないやうに気を付ける事だ。

作品の冒頭に「私」は右記のように開戦日である十二月八日について「嘘だけは書かない」ようその日の庶民の生活を忠実に書くと言っている。「主人」の無知ぶりと同様に、「私」の愛国心の不自然さも戦争に対し、好戦的なのではなく、当時の人々の考えや愛国心を忠実に再現したのではないか。

そもそも愛国心とは何なのか。『愛国心を考える』⁽⁸⁾では次のように書かれている。

英語の「patriotism」を日本語の「愛国」と訳すが、この概念の持つ著しい曖昧さから成り立っている。最初のラテン語のパトリア (patria) に由来する「パトリ」(patri-) は郷土や国を意味し、「イズム」(-ism) の法は社会主義や自由主義のように、信念やイデオロギーを意味するために用いられる接尾語である。したがって、パトリオティズムは奇妙な混成語と言える。一方ではそれは一つの感情、すなわち「愛情」であり、他方でそれはイデオロギーである。しかし、愛情とイデオロギーはそう簡単に融合するものではない。愛情は自発的な感情であり、私たちが望もうが、望ままいが内側から自然にわいてくる

ものであって、外から押しつけることはできない。他方のイデオロギーは、抽象的で非個人的なものである。

この文献の引用を見ると、愛国心とは二つの感情が介在していることが分かる。一つは「自発的な感情」もう一つは「イデオロギー」である。「イデオロギー」は「非個人的」とあるように、自身の心から自然に湧き上がってくる感情ではない。必ず、何らかの集合体により、発生する概念であるはずだ。その発生源はやはり国であろう。国が国民に愛国心を刷り込んでいくのだ。例えば、学校である『過去の克服』と愛国心¹⁰には、戦前学校で使われていた教科書について次のように書かれている。

国定教科書の制度が実施されたのは、一九〇四年から。日清戦争をきっかけに国家主義思想が高まり、様々な面で中央集権化を進めようとした当時の日本政府の方針が背景にあった。(中略)修身の教科書を見ると、「第一期」ではまだ、「ちゅうくん」と「あいこく」が分かれていた。ところが、一〇年から始まる「第二期」は日露戦争の後の富国強兵や国粹主義の影響を受け、「第一期」の教科書に「国に対する忠、家に対する孝をさらに強調すべきだ」などの批判が加えられ、「忠君愛国」が一つとなる。「教育勅語」も幅広く取り入れられた。一方一八年からの「第三期」には、第一次世界大戦と世界的なデモクラシーの機運が高まり、それを背景に生まれた大正デモクラシーの影響を受けて、国際協調的な傾向もみられるようになった。(中略)しかし、うってかわって、満州事変後の三三年からの「第四期」

に入ると、大陸進出も視野に入れ、「忠君愛国」が強まる。

その例として同書は、満州事変後の第四期の学校教育において、忠君愛国の精神を涵養する目的で、祝日・大祭日が重要視されていたことを挙げ、当時の教師用指導書が、国体を淵源とするものとしての祝祭日を強調し、それが徳育と不可分の関係にあることを特に強く主張していたと指摘している。

教科書の改正を追っていくと、国の都合の良いように、教育方針が変わっていること、また義務教育を受けた者は国の方針を刷り込んだ教育を受けていたことが分かる。子供の時刷り込まれた精神は大人になっても中々変わることはない。本文にもそれが顕著に出ている部分がある。『過去の克服』と愛国心¹⁰は忠君愛国の精神を養育する目的のもと、祝日・大祭日が学校教育において重視された事実を提示していたが、「私」も「もう百年ほど経って日本が紀元二千七百年の美しいお祝ひをしてゐる頃に、私の此の日記帳が、どこかの土蔵の隅から発見せられて、百年前の大事な日」とあるように、国が定めた祭日を非常に大切にしていたことが見て取れる。また「主人」と「伊馬さん」も紀元二千七百年を「ななひやく」というのか「しちひやく」というのかと祭日に関する読み方にこだわりをみせていた。彼らもまた、教育を通して忠君愛国の精神をしっかりと刷り込まれた人物として造形されていたと考えられる。

四 おわりに

以上に見てきたように『十二月八日』について、従来不自然さの指摘されていた箇所はいずれも当時の社会状況を反映した描写で

あったと考えることが出来るであろう。『十二月八日』の「私」以外にも坂口安吾『真珠』の描写「涙が流れた。言葉のいらない時が来た。必要ならば、僕の命も捧げねばならぬ。」¹¹⁾や上林暁『歴史の日』の描写「我々の住む世界は、それほどまでに新しい世界へ急展開したことを、私ははつきりと感じた。」¹²⁾等、開戦日に似たような感動を述べた場面が多く見られることも本稿の考察の証左となろう。すなわち、『十二月八日』は、戦争賛美、あるいは反戦、厭戦を表明した作品ではなく、そこに描かれているものは、当時の、等身大の市民の姿そのものではなかったか。そしてその背景には、教育によって植え付けられた「愛国心」という「奇妙な混成語」と、そこから生まれた感情があったと推測される。しかし、「私」の中には戦争に対する不安もある。「日本は本当に大丈夫でせうか。」「銭湯へ行く時には、道も明るかつたのに、帰る時には、もう真つ暗だつた。灯火管制なのだ。もうこれは、演習ではないのだ。心の異様に引きしまるのを覚える。でも、これは少し暗すぎるのではあるまいか。こんな暗い道、今まで歩いた事がない。」等が挙げられる。この部分は、国の介入がない「私」の本心である。『十二月八日』は、「愛国心」が「自発的な感情」と「イデオロギー」の奇妙な混成語であるように、国による思想統制によって本来、簡単に融合するはずのない「イデオロギー」と「自発的な感情」としての愛情の融合が、強行された時代の市民のあり方を体现した作品だと読み解けないであろうか。

注(1) 赤木孝之『戦時下の太宰治』(武蔵野書房、一九九四・八)

(2) 鈴木敬子『十二月八日』(太宰治) 解説(読む)『日本文学』三七

巻二二号、一九九八・一二)

(3) 井上雅人『洋服と日本人 国民服というモード』(廣済堂出版、二〇〇一・一二)

(4) 伊藤彰浩『戦前期日本における高等教育と就職難問題―その系譜と比較史的考察』(『大学論集』第一九集、一九九〇・三)

(5) 小川哲哉・小川精一・佐喜本愛・勝山吉章『日本教育史概論』(青簡舎、二〇〇八・一〇)

(6) 坂口安吾『真珠』(『文藝』一九四二・六)

(7) 上林暁『歴史の日』(『新潮』一九四二・二)

(8) テッサ・モリス・スズキ著、伊藤茂訳『愛国心を考える』(岩波書店、二〇〇七・九)

(9) 朝日新聞取材班『過去の克服』と愛国心(朝日新聞社、二〇〇七・四)

(10) (9)に同じ

(11) (6)に同じ

(12) (7)に同じ

付記『十二月八日』の引用は筑摩書房版『太宰治全集』第五巻(一九九一・一)により行い、旧字体は新字体に改めた。なお本稿は二〇一六年卒業論文をもとにし、加筆修正を加えたものである。